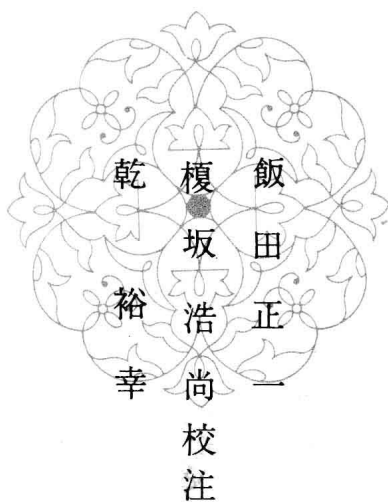




古典俳文学大系 3

# 談林俳諧集 一



集英社

古典俳文学大系 3

談林俳諧集一

昭和46年9月10日  
昭和47年5月20日  
初版発行  
二版発行  
©

定価三八〇〇円

校注者

飯田正一  
榎坂浩尚  
乾裕幸

編集

株式会社創美社  
東京都千代田区神田神保町  
三ノ一七ノ三都ビル

発行者

陶山巖

印刷所

大日本印刷株式会社  
大文堂印刷株式会社

発行所  
株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇  
電話東京二六五局六一一ノ一  
振替東京一五六五三番  
郵便番号一〇一三番

落丁本・乱丁本は本社にてお取替いたします

# 目次

|         |     |
|---------|-----|
| 解説      | 三   |
| 凡例      | 三   |
| ゆめみ草    | 一七  |
| 境海草     | 一〇三 |
| 続境海草    | 一三三 |
| 生玉万句    | 一六六 |
| 西宗因千句   | 二〇六 |
| 山宗因千句   | 二〇六 |
| 大坂独吟集   | 二三三 |
| 信徳十百韻   | 二六三 |
| 江戸談林十百韻 | 二六七 |
| 俳諧談林十百韻 | 二六七 |
| 俳諧当世男   | 三三三 |
| 天満千句    | 三三五 |
| 西俳諸大句数  | 三九〇 |

|            |     |
|------------|-----|
| 蛇之助五百韻     | 三九  |
| 宗因七百韻      | 三九四 |
| 大坂檀林桜千句    | 四〇九 |
| 俳諧 虎溪の橋    | 四二九 |
| 物種集        | 四三八 |
| 二葉集        | 四七六 |
| 俳諧 風鳶禪師語路句 | 五二七 |
| 俳諧 江戸蛇之鮓   | 五三三 |
| 投盃         | 五四四 |
| 俳諧 東日記     | 五七二 |

## 解説

### 一、談林の先駆

明暦二年正月中旬、京三条寺町誓願寺前の書肆、安田十兵衛方から『ゆめみ草』五冊が出版された。

明暦二年といえは、貞門俳諧の総師松永貞徳没して三年、次期俳壇指導者の地位をめぐる門弟間の暗躍が漸く表面化してきた年に当る。松江重頼・雛屋立圃の先達は勿論、山本西武・鶏冠井令徳・安原貞室をはじめ、新進気鋭の北村季吟・高瀬梅盛に至るまで、夫々に独立、お互に他を意識しつつ独自の方法で自分の俳諧地盤の拡大に懸命の時期であった。従って、貞徳没したとはいえ、門弟間の角逐がこれまでの貞門俳諧のあり方を反省させ、より変化に富んだ内容豊かなものに拡充し、寛文末年頃までの貞門全盛時代の基礎を固めあげた時期であったのである。

ところで、この『ゆめみ草』五冊は、京都の書肆から出版された撰集でありながら、同じこの年に刊行された『崑山土塵集』（令徳）・『玉海集』（貞室）・『口真似草』（梅盛）らの貞門撰集と比べて、様相に随分の相違が認められる。すなわち、先ず貞徳の句が一句も入集していないのである。貞門俳諧の撰集は多少の差はあっても、必ず貞徳の句を入れるのが常識であり、それも巻頭乃至は巻軸に飾り立てるものとされているのだが、ここではその慣例が全く無視されて一句も見当らない。かえって荒木田守武の句が三句掲げられているのである。談林俳諧が守武流を標榜したことを考え合わせると、貞門撰集よりもむしろ後々の談林系撰集に繋がるものといわねばならない。

次に、本書の俳人を見るに、大阪が一八九人、堺が七六人、伊勢が五六人、江戸が四一人であるのに対して、京都中央俳壇の俳人はわずかに八人、それも著名の俳人といえは、当時新進の季吟と梅盛の二人にすぎない。本書が大阪天満の蔭山休安の撰であるから、大阪・堺の作者が多いのは当然だが、京都中央俳壇の作者はいかにも少ない。また、当時すでに天満天神の連歌所宗匠になっていた西山宗因の句が「一幽」の名で七句入集している。天満で撰ばれたという地理的關係を無視することはできないが、西山宗因——談

林俳諧という結びつきを考えると、本集が従来の貞門系でなく、別種の、むしろはっきり談林系につながるものであることは言うまでもあるまい。

貞門俳諧は寛永初年から寛文末年までの約半世紀の長きにわたって続き、延宝改元と同時に今度は談林俳諧の出現により貞門勢力が駆逐されていったと考えられている。が、この『ゆめみ草』五冊を見ると、談林俳諧が突如として延宝初年に出現したのではなく、貞門俳諧の隆盛のかげにひそかに芽ばえ、徐々に成育を続け、やがて延宝期の華麗なる開花期に受け継がれていったものであることが知られるであろう。

明暦二年 ゆめみ草（休安）

万治三年 境海草（顕成）

寛文元年 埋草（成安）

寛文五年 大雪千句（重安・保友・一幽）

寛文六年 遠近集（長愛子）

寛文十年 寛伍集（元順）

添舟十万句（可玖）

寛文十一年 蛙井集（清勝）

落花集（以仙）

難波草（宜休）

塵塚（成之）

寛文十二年 続境海草（顕成）

これらはいずれも大阪・堺を中心として編まれた集である。直ちに談林につながるものもあるが、こうして並べてみると、談林俳諧への道が意外に早くから用意されてきたことに改めて思いを致さねばなるまい。

## 二、西山宗因の俳諧

談林俳諧の中心人物は西山宗因である。宗因は肥後八代城主加藤正方に仕えたが、二十七歳で主家改易の悲運に遇って浪人し、主君と共に京に上って里村家に入出入して連歌の道に励んだ。その後四十三歳の時、旧主が広島藩お預けとなったのを機に主君と別れ、大阪天満天神の連歌所宗匠となり、以降専ら連歌所経営に力を用い、連歌師としての名声を高めていった。と同時に俳諧にもしきりに興味を示した。しかもその俳諧は、連歌所宗匠としての立場上、あくまで余技であることが絶対条件であったし、一方また、余技であったために余計に俳壇に対して自由な立場でものが言えた。貞徳のように、俳諧を無理矢理に「連歌への階梯」と定義づけなければならぬというのでもなければ、「俳諧とて和歌の一体」であるなどと勿体ぶる必要もなかったのである。

『ゆめみ草』に入集した頃の宗因句は、

五月 雨や天下一枚うち曇

連歌座に打越嫌ふ礎哉

など、いずれもまだ貞門古風の域を一步も脱していない。しかし、寛文四年の『蠅打』には、

大坂宗因、宇治にて「里人の渡りさふらふか橋の霜」とせしを、謡をたゞちに取りたるとて人々興じければ、扱はよき事じやと心得て、「生国は越前鱈で候ひき」「小鮎なます首かき切て捨てんがり」などいひて、謡の本を至極の歌書とする人有りと見えたり。とあって、宗因の「謡をただちに取」る俳諧が極めて斬新な風体として、俳壇の人氣を独占した様子が明らかであろう。貞門俳諧の「詞の駄洒落」による俳諧、古典故事に典拠を求める俳諧が、漸くマンネリズム化していた時代であったから、より一層の新鮮さを覚えさせたのである。宗因と親交のあった松江重頼のごときは、この「謡を直ちに取る」俳諧について『佐夜中山集』（寛文四）や『時勢粧』（寛文十二）に於て、全く異常なまでの傾倒ぶりを見せている。しかもこの傾向は、宗因・重頼、並びにそれにつながる人達だけでなく、

此ごろ謡の詞をとりて発句などにする人おほし。……まことに当時はやり物と見えて、さいつ比、片田舎より発句を五十書きしるして、予に点をこはれたるを見侍しに、五十句の中三十六句、謡の詞を取て仕立られたる句どもにて侍りし。と『打出の小槌』に述べているように、寛文期俳壇を大きくゆさぶる新傾向となったのである。

しかし、ここで注意しなければならないのは、こうして高まってきた宗因流の謡曲調俳諧が直ちに談林俳諧へとつながっていくのではないということである。確かに、新趣向として当時流行を極めたにしても、俳壇の主流は依然として京都中央俳壇にあった。そして、宗因自身あくまで自分を俳壇のオブザーバーの位置にしか置いていない。宗因の本領はあくまで連歌なのである。従ってこの謡曲調も、貞門内部での新趣向として非常な評価は得ていても、反貞門の故をもって評価されていたのではさらさらない。つまり、この謡曲調の流行がそのまま直ちに談林俳諧の登場につながっていくのではないのである。談林俳諧の出現には、やはりもっと世代を異にした新進俳人の活躍がなければならなかった。

### 三、『生玉万句』と大阪俳壇

寛文十三年春、大阪生玉神社社頭に於いて、井原西鶴は『生玉万句』を興行した。それは、二百人に及ぶ多数の俳人を糾合した、十二日間に亘る一大ページェントであった。

飛梅やかろくしくも神の春

という『守武千句』の巻頭句を巻頭に据えて、「守武流」の俳諧を宣言した西鶴は、序にこういう。

遠き伊勢国みもすそ川の流を三盞くんで酔のあまり、賤も狂句をはけば、世人阿蘭陀流などさみして、かの万句の数にものぞかれぬ。されども生玉の御神前にて一流の万句催し、すきの輩出座その数をしらず、十二日にしてこと畢れり。指して嘲る方の興行へ当る所にして、其功ならずと聞しは、予がひが耳にや。ともいへかくもゆへ、則座の興を催し、髭おとこをも和げるは此道なれば、数寄にはかる口の句作、そしらは誹れわんざくれ。

すなわち、この『生玉万句』の興行は、守武流の軽口に心酔した西鶴らを阿蘭陀流と誹謗し、万句の仲間から除外した守旧派への反逆として示した壮挙であったという。この華々しい守武流の宣言は俳諧史に大きい紀元を画するものであった。

大阪俳壇には、すでに『ゆめみ草』に明らかのように、守武流の底流はあったし、談林への道は用意されていた。けれども、この大阪俳壇を一挙にして守武流の俳諧で塗りつぶし、談林一色に塗り変えてしまうには、こうした華々しいエポックメイキングな事件がなければならなかった。その意味で『生玉万句』は正にうってつけの壮挙であった。西鶴はこの年三十二歳の青年、従った悦春・幾音・一得・西随・不琢・由平等、その大体は三十歳前後の青年俳人達が多かったようである。中央京都俳壇の息吹を受けず、新興都

市大阪の極めて意欲的現実的な町人感覚を身につけた、この若き青年俳人層にしてはじめてなしとげ得た快挙であった。宗因と親しく交わり、謡曲調の俳諧などよんでいた大阪俳人ですら、自ら進んで貞門古風の体制をうち破ってまで異を立てようとはさらさら思わなかった筈だし、そうした煮えきらぬ守旧の徒への青年らしい反撥がこの『生玉万句』だったのである。

なお、ここで注目せねばならないのは、この万句の結びの一卷に宗因を迎えていることである。勿論、宗因自ら進んで参加したのではなく、西鶴が自分達の俳諧活動の権威づけのために敢てかつぎ出したと考えるのが妥当のようだが、宗因はこれを契機にこの談林新運動に極めて積極的となり、この延宝元年の八月には『蚊柱百韻』をよみ、すぐ公刊している。今まで底流として表面に出なかった守武流が、一たび『生玉万句』によって表面に躍り出ると、宗因は積極的な動きを見せはじめたわけである。

延宝三年には『宗因点取』『宗因批判』と掲げた『大坂独吟集』が出版され、延宝四年には『宗因五百句』、延宝五年には『宗因七百韻』、ほぼ同じ頃『山宗因後五百韻』と、続々と宗因を売り物にした俳書が出版されていった。それだけでなく、常に大阪俳壇のリーダーとして、ともすれば小グループで固まろうとする俳人達をうまくコントロールしてまとめていったのである。梅翁宗因の名はかくして大阪俳壇の上にどっかり腰を下した。大阪俳壇に於て宗因の評価がどの様であったかは、当時の大阪俳書の殆ど全部が宗因の句を巻頭ないし巻軸に掲げていることからでも明らかであろう。

#### 四、守武流と矢数俳諧

守武流、宗因流と呼ばれる俳諧は一体いかなるものをいうのであろうか。季吟は『俳諧用意風鉢』の中で、  
守武が千句にも

夕時雨親孝行の雲井にて

松のはごしにしやうじする比

鹿の音ちかきつゞらくしばこ

などやうのたぐひあり。猶此比も少々かやうの無心所着ムシンショジャクの句をこのめるともがらあり如何。  
という問いに対して、次のように答えている。

守武は中比の作者ながら、俳諧をわたくしになぐりて。式法をやぶり。花に吉野をもきはらず。かく無心所着ムシンショジャクにいひなしたる人

なればにや。近代都のほとりには其風用る人なくなり侍し。……其わけなき事をいひあへる異風の俳諧師。これ守武が風などいふにことよせて。わけなき事の方人として。亦わけなきことをいひあひて。道のため得トクすくなく失シツおほからんは。まことにはいかいの魔民マジンとや申べからん。

『守武千句』の三例はいずれも無心所着の句である。すなわち、夕時雨のする雲井での親孝行とか、松の葉ごしに精進するとか、また葛籠や櫛箱の側で鹿が鳴くなど実際にあり得ない事実無根の表現である。この事実無根の表現、無心所着の句を守武流とよび、これに心をうばわれてはいけなさと季吟は説くのである。ところが、談林俳諧はこういう無心所着の中にこそ俳諧の面白味があるので説き、この無心所着こそが談林俳諧の真骨頂をなすものと定義づけるのである。

宗因は、

抑俳諧の道、虚を先として実を後とす、和歌の寓言、連歌の狂言也

といい、岡西惟中も、

思ふままに大言をなし、かいてまはるほどの偽といひつゞくるをこの道の骨子とおもふべし  
と述べ、更には

一句にあらぬ事をいひ出る事俳諧也

とまで言っているのである。

それでは、こうした無心所着の談林俳諧を技法的にみた場合、一体どういうものであったのだろうか。先ず、俳言（俗語）が大幅に拡大されていること。貞門俳諧では「あまりに俗すぎたるは如何」という反省を常に伴っていたが、ここではその制約はそれほどでなかった。次いで、貞門では殊更に禁じていた、用付・後付・噂付・ぬけがら等の手法を大いに活用してよかったのである。それに指令・去嫌もほとんど無視して自由自在に近かった。前句への続きは付物等でうまく処理し、早く着けるのが最上とされたから、早付・早口もよろこばれたのである。

こうした早口俳諧を発展させたのは、井原西鶴である。西鶴は延宝五年五月、大阪生玉本覚寺に於いて、一日一夜に千六百句の速吟を興行した。時に三十六歳。これが翌年六月出版の『俳諧大句数』で、いわゆる矢数俳諧の最初である。矢数とは、京都三十三間堂に伝わる行事で、御堂の西側縁の南端から北端の的めがけて矢を射、当日の暮れ方から翌日の暮れ方まで、丸一日間に射通した通

し矢の数を競うものである。

ところが、この矢数俳諧に対して同年九月に月松軒紀子が千八百句の独吟を行い、『大矢数千八百韻』として刊行、続いて延宝七年三月には、仙台の大淀三千風が三千句独吟を成就して『仙台大矢数』として刊行した。負けられない西鶴は延宝八年五月に四千句の独吟を行って翌年『大矢数』として刊行した。更に貞享元年六月には、一昼夜に二万三千五百句独吟という驚くべき記録をつくったのである。

矢数俳諧はかくして、早口俳諧を誇ろうというところから出たのだが、こうした現象も談林俳諧、守武流の一面、一現象だったのである。

## 五、江戸の談林

延宝三年夏、岩城平七万石の城主内藤風虎の江戸邸に宗因は招かれた。風虎は文学大名として著名な人で、赤坂溜池の江戸邸では、いつも大勢の俳諧師たちを集めて、風流文事を楽しんでいた。さて、宗因はここで六会を持つ。中でも同席した高野幽山・小西似春らほと京都に住み、寛文末年頃江戸に移住した人であって、その後の、江戸俳壇における宗因流の大きな推進力となった。

一方、神田鍛冶町の田代松意を中心とした「俳諧談林」を称した人々も、その中の一人野口在色が、延宝二年春、商用で大阪に来て、直接宗因門に入った関係で、宗因の発句を願って、

されば爰に談林の木あり梅の花

の一句を与えられ、それを発句に据えて千句を巻き、『江戸俳諧談林十百韻』として公刊した。これはうまく全国俳壇の注視を集め、「俳諧談林」の名は全国にまで知れわたることになった。松意は続いて、『江戸俳諧三百韻』(延宝四)『幕尽』(延宝六)を公刊、江戸談林の普及につとめた。

なお、その後京都俳壇に於いて、宗因の新風を謳歌していた有力俳人たちが、江戸の同門系との交歓を目録んで次々と東下してきた。先ず、延宝五年、京の信徳が東下し、桃青・信章と共に『江戸三吟』(延宝六)を興行板行した。次いで、その翌六年、青木春澄が下向、高野幽山・池西言水・小西似春・松尾桃青らと歌仙を興行した。これが『江戸十歌仙』となって刊行されている。また同年冬、大原千春・伊藤信徳が東下して、内藤露沾公・幽山・言水・桃青らを相手として俳諧を興行、『かり舞台』(延宝七)が出来上った。

その後、「俳諧談林」の松意らは、一時時流に乗って勢い華やかであったが、やがて一部は幽山らの勢力に吸収されてしまい、江戸俳壇は宗因流の崩壊と共に、新しい生きる道を京俳壇との結びつきに見出していくことになるのである。

## 六、京都の談林

京都は貞門俳諧生粹の土地である。それに延宝のはじめ頃までは、季吟・梅盛・西武らはまだ現役の歴々たる指導者の地位にあつたから、江戸・大阪にいかにも談林新風が吹き荒れていても、直ちにその新風になびく者は現われなかった。

延宝三年七月、菅野谷高政は『絵合』に於いて、宗因敬慕の姿勢を示した。この高政ははじめ江戸に住んでいたもので、延宝二、三年頃京都に移住しても、古い派閥などには比較的自由な立場にあり、談林新風への関心も強かった。従って新風になびくことに何の顧慮も不要であった。ために、延宝五年の『後集絵合千百韻』では、談林俳人としての旗幟を鮮明にし、京都における宗因流の急先鋒となったのである。高政宅に招待された宗因が「末茂れ守武流の惣本寺」の一句を贈ったことから、自ら「惣本寺」を名乗って、ますます談林への傾倒ぶりを示すに至る。それが延宝七年の『俳諧中庸姿』となつて完成する。この『中庸姿』をめぐって、新旧の間ではげしい論争が始まり、以後貞門対談林の論戦がしばしばくり返されることになるのである。

高政に続いて田中常矩が京都に於ける新風の推進役であった。延宝五年の『蛇之助五百韻』は完璧な新風体を示している。また、富尾似船も同じく五年には『隠簀・隠笠』を撰して、保守派の句を完全に除外し、新風有力者の句を専らのせている。

古風貞門の本拠地京都に於てさえ、ほぼ延宝五年を転機として宗因流は急激にその支持者をふやしていくのである。

## 七、宗因流の終焉と新風への期待

花々しく全国を席捲した談林俳諧も、延宝末年にははやくもマンネリズム化してしまった。『続無名抄』にのせる惟中のことばは、京・江戸・大坂の俳士、昨日の作けふは古しとし、春もてあそぶ風儀秋はもちひず、去年の格ことしはかはりぬ。これらを板行して国々へ下す。遠国波濤のすゑにやゝ用ひてかくもあらんかと、もとしなれし風格を五句三句あらため、少しもとづくうちに、また異風の軀をとり行ふ。

とあって、当時の俳風がいかにも目まぐるしく変転していたものであるかを如実に物語るものであった。桃青芭蕉が「俳諧年々に変じ

月々に新也」といったのも、才麿が「三度風躰をかへて三たび古し」といったのも、みな丁度この延宝八、九年頃のことである。

このめまぐるしい変転は一体どこから来たか、結論から言えば、宗因流俳諧のマンネリズム化にあった。守武流によった宗因の俳諧は、勿論「無心所着」が中心であった。こうした無心所着の表現は反覆常套化されると、新鮮度はすっかり色褪せてしまうものである。かくして、俳壇はただひたすら「新奇を競う」という変風の時代が幕ひらくのである。

先ず、『祇園拾遺物語』の著者はこの頃を回想して、

十七字につまりたる句は、先づ下手らしく文盲也とて態いひてもいへども詞を加はへてあます程に、歌一首より長くなりてしかも一句の落着せぬことおほかりし。其比の句に

花をかくし時や枯たる柴かゝの歩も若木にかへる大原の姿

とあるように、やたらに長い字余り句がしきりに作られたのである。また逆に、字足らず句も作られたらしいが、定型否定という点では全く同一のことであろう。

次に栄えたものに、倒語法がある。天和三年の『虚栗』に見える芭蕉句、

髭風ヲ吹て暮秋嘆ズルハ誰ガ子ゾ

などその例であるが、これもまたしきりに使われたようである。

次に一番文芸的なものに漢詩文調の採用がある。字余り・倒語法など明らかに新奇なるものを目ざすものであって、ただそれだけに終るものであったが、この漢詩文の流行は、意図は明らかに新奇なものを求めようとしたのであって、そこに何か文芸的なものがひそんでいることに気づいて、人々は争ってこの方法に走ったようである。そしてこの漢詩文調の一番早い例は延宝九年の似船の『安楽音』であるとされている。それから天和の頃までの二、三年は正に漢詩文全盛の時代であったようである。

以上のような変風模索の時代に、西山宗因は死んだ。天和二年三月二十八日のことであった。変風の時期であつただけに余計ショックは大きかった。西鶴は『好色一代男』をもって、この年、散文界に巣立ったし、惟中も儒に帰して俳壇を去った。芭蕉はまだ蕉風の開眼にまでは至っていなかった。

(榎坂 浩尚)

## 凡 例

- 一、本書は、談林時代の俳諧撰集ならびに句集の代表的なものをほぼ年代順に収録、各底本を忠実に翻刻することを主旨とした。
- 二、校訂にあたっては、読解の便をはかり、概ね次の要領に従った。
  - 1、本文には、読みやすくするために、適宜段落を設け、句読点・濁点をつけ、会話・引用文等には「」、書名には『』をつけた。ただし、底本にもとから濁点のある場合には、その右に（濁ママ）のごとく注して区別した。
  - 2、明らかに底本の誤字と認められるものは、その右に（ ）に入れて正字を示した。
  - 3、使用漢字は、原則として現行漢字に改めたが、迂（遷）・涼（涼）・灵（靈）・逃（逃）・耻（恥）・杓（杓）・鼓（鼓）・躰（体）・菴（庵）・貞（貌）・鴈（雁）・脉（脈）・帡（紙）・劬（州）・夏（事）・艸（草）・役（役）・裝（装）・哤（嘩）・最（最）・柰（松）・烁（秋）・灯（燈）などはそのままにして、原本の面影を残すことにした。
  - 4、できるだけ読みがなをつけ、一部にふり漢字をつけたのは、その読解を補うためである。読みがなは歴史的かなづかい、ふり漢字は原則として現行漢字を使用した。ただし、底本にもとからある読みがな、ふり漢字にはハ ヴをつけてこれを区別した。
  - 5、底本に送りがない場合も、読みがなによりそれを補うことにした。
  - 6、かなづかいは底本のままとしたが、歴史的かなづかいに正したものを、右に（ ）に入れて示した。
  - 7、底本の脱字・脱文は「」に入れて補い、衍字は（ ）でかこみ右に衍と注して示したが、説明を要する場合は、うしろに注記して断った。
  - 8、底本のかたかなは、特に意識して使用したと思われるもののほかは、原則としてひらがなに改めた。
  - 9、漢文は、原則として返り点・送りがなをつけず、句読点のみつけた。ただし、部分的には読み下しルビをつけたところもある。また原文に、もとから返り点・送りがなのついている部分は、そのままとした。
- 三、右に列挙した以外に異なった扱いをした場合は、各書の例言中に明記した。

- 四、各書のはじめには、簡単に書誌的な解題をつけた。
- 五、底本や校合に用いた諸本については、解題中に明記した。
- 六、注は、本文右肩に算用数字で番号をつけ、適宜各卷末にまとめてかかげた。
- 七、各書の担当者名は解題の終りに（ ）をして記した。

